令和７年度　第２回八尾市芸術文化振興審議会　議事録

日　　時	令和８年３月27日（金）　午後６時～午後８時
開 催 場 所	八尾市商工会議所３階　多目的室
委　　員	藤野（会長）、緒方、大槻、石井、小國、上出、髙安、萩原、張本、藤田 ※敬称略
事　務　局	岩井（魅力創造部）、杉島、古川、松村、渡辺（文化・スポーツ振興課）
八尾市文化振興事業団	北芝
傍　聴　者	０名

事務局より配付資料の確認。

・次第
・資料１　八尾市芸術文化振興審議会規則
・資料２-１　会議の公開に関する指針
・資料２-２　八尾市情報公開条例（抜粋）
・資料３　高校合同文化祭の総括
・資料４　まちかどライブクリエイションの総括
・資料５　事業視察アンケート
・資料６　八尾市芸術文化振興審議会ワーキング部会報告書
「芸術祭の開催構想（案）について」

【その他】
・八尾市芸術文化振興審議会委員名簿
・配席図
・各種チラシ

１．開　会

①岩井　魅力創造部長よりあいさつ。

今年度については、大阪・関西万博に八尾市として様々な出演・出展をしてきた。特に高安能、河内音頭といった本市の伝統文化をしっかり市内外に発信できたということと、やおうえるかむコモンズの出展もさせていただき、多くの来場をいただいたことで、本市の芸術文化のこれまでの取り組みというものについても、広く発信できたと考えている。

令和８年度については、引き続き、芸術文化振興が本市の全体の中での重点事業に位置づいており、アフター万博の要素も取り入れた形で事業を展開していきたいと考えている。また、令和１０年度の芸術祭に向けた準備を進めるという意味でも非常に大切な一年になってくると考えているところである。

本日の審議会では、ワーキング部会で検討いただいた芸術祭の開催構想案について報告させていただくので、委員の皆様におかれては忌憚のないご意見をいただくことをお願いし、簡単ではあるが、挨拶とさせていただく。本日はどうぞよろしくお願いする。

②藤野会長より近況報告を兼ねたあいさつ。

➢ **神戸市室内管弦楽団の存続危機と現状報告**

本日午前中に開催された、神戸市民文化振興財団の理事会について報告する。

1980 年頃に神戸市が設置した「神戸市室内管弦楽団」が、現在、解散の危機に直面している。

- **財政状況**

かつて 1 億円規模であった市からの補助金が 8,500 万円まで削減され、さらに市は 2027 年度での予算打ち切りを打ち出している。財団全体でも約 1 億 4,000 万円の赤字を抱え、非常に厳しい経営状況にある。

- **理事会の動向**

本日の理事会では「解散」を決議する予定であったが、慎重な議論を求める声があり、継続審議となった。終了後の記者会見には多くのメディアが詰めかけ、社会的な関心の高さが伺える。

- **今後の展望**

補助金カットによる解散ではなく、市民に愛される楽団への変革や民間寄付の獲得など、生き残りの道を模索する「時間延ばしの戦略」の最中である。

➢ **文化政策を取り巻く全国的な「冬の時代」**

神戸の問題は一自治体の問題にとどまらず、日本全体の文化政策の転換期を象徴している。

- **KPI の導入**

国立美術館・博物館においても、収益率や入場率などの数値目標（KPI）が厳格化され、達成できない場合は廃止も辞さないという厳しい枠組みがはめられている。

- **文化予算の削減**

財政難を背景に、稼げない文化事業を切り捨てる傾向が顕著である。コロナ禍の支援が一段落した今、全国的に波及しうる深刻な事態であると危惧している。

➢ **下町芸術祭の快挙と「民の力」による結実**

厳しい状況の一方で、神戸の新長田地区を拠点とする「下町芸術祭」では、長年の積み重ねが実を結ぶ明るいニュースがあった。

- **ダブル受賞**

事務局長の岩本氏が撮影した芸術祭のポスタービジュアルが、写真界で権威のある「APA 賞（日本広告写真家協会公募展）」の特選賞を受賞。同時に、芸術祭自体も神戸市の「地域貢献賞」を受賞した（Ｂ委員が代表受領）。

- **継続の力**

コンテンポラリーダンスの拠点「ダンスボックス」が移転して１７年、故・大谷氏らがまいた種が１５年の歳月を経て大輪の花を咲かせた。これは地域に根ざし、民間の力を結集してきた成果であり、まちの誇りである。

➢ **八尾市における展開への期待**

神戸の文化行政が「冬の時代」にあると感じる中で、「やおうえるかむコモンズ」やこの審議会が持つ熱量と温かさは、非常に心強く感じる。

新長田での成功事例と同様の熱量が、今まさに八尾でも動き出している。Ｂ委員をはじめとする皆様の力を借りながら、八尾の芸術祭や文化活動を、素晴らしいものへと発展させていきたい。

２．案　件

（１）やおうえるかむコモンズ推進会議の取り組みについて

①高校合同文化祭の振り返りについて、資料３に基づき、事務局から説明。

②まちかどライブクリエイションの振り返りについて、資料４に基づき、事務局から説明。

【会長】

審議会委員の意見は実際に事業視察された方のアンケートからの抜粋ということだが、結構辛口のものもある。皆さんからご意見をいただいて議論ができればいいと思うがいかがか。

最初のアンケートの結果は、かなりクリアに時系列での展開が出ていて、40 代以下の参加者の比率が増えている。ファミリー層や現役世代への普及が進んできた。これはどういう風に現状分析をされているか。

【事務局】

市が主体というところから、推進会議メンバーが主体的に実施するやり方に変わったというところで、推進会議メンバーでファミリー層や子ども向けを軸に考えられている方が多かったことが考えられると思う。

【Ａ委員】

情報発信の仕方について、推進会議メンバーが主体になることによって、 SNSの活用が増えた。SNSを使っている層は、高齢者よりも若い方が多い。市の広報（市政だより）を通じて全市民にも情報は来ているが、市の広報はどちらかというと、高齢の方が見られる確率が高い。

一方、SNSは若い世代にも見られる確率が高いというところで、その発信の仕方が増えたことによって、若い層にも届き始めたというところだと思う。

【会長】
　今年度から新設した項目「身近に芸術文化を感じる」市民の割合は初めから高いスコアが出ている。これは、実際にまちかどライブクリエイションの参加者が感じてくれた結果か。

【事務局】
　参加していただいた方に聞いているので、高くなる傾向にあると思う。

【Ａ委員】
　とはいえ、全八尾市民 26 万市民の皆さんにこの情報が届いているかであるとか、活動が届いているかというと、まだまだ充分ではないと思っているので、今後、2028 年度の芸術祭に向けて、いかに全市民の皆さんに届け、参加していただき、ということをしていくのかというのが、このパイロット事業の中で、頑張っていかないといけない、課題はたくさんあると思っている。

【会長】
　コモンズの認知度も 10%から３割近くになっているが、これもイベントに来てくれた人へのアンケートだ。来ていない人も全部おしなべて、市民の 10%くらいか。

【Ａ委員】
　とはいえ、認知度が広がっているというのも確実に感じているところで、私も一般の市民の方から声をかけられる機会であるとか、このマーク（コモンズのマーク）よく見るねと言っていただいくことも、実感としては少しずつではあるが増えてきていると思う。引き続きいろんな形で発信をしていかなければならないと思う。

【会長】
　今後の展望について、審議会委員の意見には厳しい意見もある。
　対話型鑑賞はこれから作っていけると思うが、マルシェ主体の形式が主流になっているという意見がある。確かに、既存のものに乗っかって今までやってきたというのもあるが、このあたりはポジティブに取ったらいいのか、ネガティブに取ったらいいのか、すごく悩ましい。

【Ａ委員】
　まだ認知度が低いので、認知を上げるという意味ではマルシェの活用もありだと思う。
　にぎわいを創出するのが目的ではなく、アートに触れる、芸術文化に触れる機会を増やしていくことが八尾市芸術文化基本条例（以下、「条例」という。）であり、八尾市芸術文化推進基本計画（以下、「計画」という。）の目的になってくるので、現段階では認知度を広めることをかなり意識しながらやっていると思う。
　今後、より芸術文化に触れる機会を増やしていかないといけない。

【会長】

Ｂ委員が一昨日の受賞の時にお話しされていた言葉が印象的で、下町芸術祭を何のためにやっているのかというところで、Ｂ委員の哲学が出ていたと思う。

まだ八尾市との関わり方はこれからということになるし、あとで出てくるが、芸術祭の中心的な立場に立つ時に、どういうこうコンセプトで関わっていこうとなさっているか。

あるいは、この審議会委員の意見を見て、どういうふうに感じられたか。

【Ｂ委員】

➢ **八尾市内リサーチの状況**

先日、Ａ委員や事務局と共に八尾市内の各会場を巡るリサーチを行った。現在、そこでの気づきを自身の中で熟成させている段階であり、具体的な構想については、今後さらに深めていきたい。

➢ **芸術祭の本質：表現を通じた「挑戦（チャレンジ）」**

神戸の新長田で１０年間「下町芸術祭」に携わってきた経験から、改めて芸術祭の目的を問い直している。現代アートの文脈や評価軸も重要だが、最も本質的なのは、「主体となる一人ひとりが、表現を通じて何かに挑戦すること」だと考えている。

- **自己の相対化**

高校合同文化祭の振り返りにもあったように、自己表現を通じて他者の表現に触れ、自分の立ち位置を相対化・比較することは極めて重要である。

- **差異の理解**

表現を表明し合い、共鳴し合う中で、お互いの「違い（差異）」を認め合う。単に「分かり合う」だけでなく、違いを知るための「通過儀礼」としての場が芸術祭には必要である。

➢ **「日常の更新」と自己肯定感の向上**

芸術祭が単なる「ルーティンワーク（恒例行事）」に陥らないことが、祭りの高揚感を生む。

- **非日常への逸脱**

日常から一歩踏み出し、昨日までの自分を「更新（アップデート）」すること。たとえスモールステップであっても、その挑戦が自己肯定感を生み、互いの表現を肯定し合える土壌を作る。

- **形式にとらわれない挑戦**

例えば「マルシェ」のような形態であっても、主催者がこれまでの枠組みを超えて自分たちなりに内容を更新しようとしているのであれば、それは立派な芸術的挑戦であると言える。

【会長】

本当に、今後の展望のところに出ている審議会委員の意見というのは、すごく考えさせら

れるものが多く、11 ページの意見を一つ一つ見ながら、皆さんの意見をお伺いしたいと思うが、単なるにぎわい創出がゴールなのか、それともアートを媒介とした市民の自己変容や新たなコミュニティ形成などをめざしているのかという、このあたりも結構肝である。

にぎわい創出は全然悪いわけではないし、経済に結びつくというところでは、アートを手法として、アートを一つのツールとしてにぎわい創出をやっていく流れも全国的には見られるし、それを指標で測って成功と言うこともあるのだが、そういった方向とは一線を画すような形の芸術祭をめざすというので、今のところは合意されていると考えていいか。

【Ａ委員】

単なるマルシェで終わるのではなく、マルシェの中にどういう風なアートを盛り込んでいくのか。作品を展示するのか、パフォーマンスをするのか、ライブパフォーマンスをするのか、そこを見てもらえたらなと思う。

マルシェは当然にぎわいを創出することになるのだが、その中に必ずアートの部分を各リーダーが入れてくださっているので、そこもしっかり見ていただければありがたい。

【会長】

アートを媒介とした市民の自己変容というのは難しい言葉である。

私はこういうことが自分の考えている価値観としては一番近いとは思うのだが、アートを媒介とした市民の自己変容というのは、実際にそれを経験してみないとわからないところであり、言葉で説明しても難しい。

【Ａ委員】

- **「アート」の広義な捉え方と実践**

条例に定められている通り、絵画や立体制作だけでなく、音楽も重要なアートの一環である。やおうえるかむコモンズ推進会議が推進する活動においても、これらを包括的に捉える視点が不可欠である。

- **実例：音楽を通じた不登校からの再生**

「まちかどライブクリエイション」における具体的な成功事例を紹介したい。

- **家族による支え**

不登校を経験したお子さんを家族全員で支えようと、一家で音楽活動を開始し、まちかどライブクリエイションでのライブに出演された。

- **表現による自己変容**

音楽を通じて表現する場を得たことで、そのお子さんは立ち直るきっかけを掴み、この春、無事に高校進学を果たされた。

- **芸術の持つ力**

この事例は、音楽が、一人の若者やその家族を救う大きな力となり得ることを証明している。

➢ **今後の活動への期待と意義**

音楽だけでなく、絵を描くことや作品を作ること、あらゆる「表現」の場において、同様の奇跡や再生が数多く生まれることを期待している。

- **活動の意義**

一人ひとりの人生に深く関わり、変容を促すような場を創出していくことこそが、我々が取り組んでいる芸術文化振興活動の真の意義であると思っている。

【Ｃ委員】

➢ **高校における美術教育の現状と危惧**

現在の高校教育現場では、美術・音楽・書道といった芸術科目の教員不足が深刻であり、それに伴い美術室などの活動場所が閉鎖されている実態がある。

- **環境の欠如**

かつては放課後などに自由に創作や対話ができる場があったが、現在はその機会が削られている。

- **意欲への影響**

卒業生らが支援を試みても、日常的に活動できる場所（美術室等）が確保されていないため、生徒たちの継続的な意欲が削がれ、活動が定着しにくい状況にある。

➢ **芸術文化による人間形成の重要性**

コンサートや美術活動は、人間に力を与え、感動や安らぎをもたらす極めて重要なものである。こうした豊かな感性を育てる機会が教育現場で削減されていく現状には、強い疑問を感じている。

➢ **「やおうえるかむコモンズ」と高校生の活動への評価**

「やおうえるかむコモンズ」において、高校生が自ら高校合同文化祭の実行委員を務めていることは、非常に意義深い。

- **学校外の学び**

他校の活動と自校を比較し、刺激し合う経験は、学校の枠組みだけでは得られないものである。

- **一生の基盤**

高校時代に主体的に取り組んだ経験は、その後の人生の基盤となる。学校で補えない部分をコモンズが支えている点は、非常に素晴らしい展開である。

➢ **地域活動の「マルシェ化」と芸術の融合**

市内 28 地区にある「まちづくり協議会」の活動について、現状の課題を感じている。

- **マルシェへの偏り**

当初は多様な活動が期待されていたが、現在は集客のしやすさから「マルシェ」に偏る傾向がある。

- **芸術との融合**

マルシェという枠組みの中で、いかに芸術的な要素を組み込み、深みを持たせていくかについては、手法として非常に難しい。

【会長】

マルシェは入り口にするという使い方である。

敷居を低くしていき、その中で、知らないうちに芸術の世界に巻き込まれていたというきっかけが一番いいのかなと思う。

【Ｄ委員】

➢ **芸術祭への多様な関わり方と教育的意義**

芸術祭には、パフォーマーや作家としてだけでなく、「裏方」として関わる形もある。先ほどの高校生の事例のように、運営全般に携わることで横のつながりが生まれ、表現者でなくとも文化を通じて自己を高めていくプロセスは非常に有意義である。

➢ **参加者の技術水準（レベル）の多様性と葛藤**

市民参加型の芸術祭では、参加者の技術水準に大きな幅が生じることが予想される。

- **多様な背景**

専門的な高い技術を持つ層から、障がい者施設の方々、あるいは家庭内の課題を抱えながら家族バンドで挑戦する層まで、活動の背景は一様ではない。

- **鑑賞者の視点**

観客としては「一定水準以上の質の高い表現」を求める側面がある一方で、身近な境遇の人が舞台に立つ姿に勇気をもらい、「自分もできるかもしれない」と可能性を感じる側面もある。

➢ **芸術祭のコンセプトと選定基準への問い**

市民レベルの芸術祭を開催するにあたり、どのような評価軸やコンセプトを据えるべきか。

- **選別と包摂**

「一定のレベル」を参加条件とするのか、あるいは「やる気のある人」を広く受け入れるウェルカムな姿勢をとるのか。

- **運営上の判断**

物理的に全員の参加が難しい場合、どのような基準で選別や構成を行うのか。

芸術監督や事務局として、この「質の担保」と「参加の門戸」のバランスをどう考えているのか。

【会長】

➢ **「自己満足」と「表現」の境界線**

芸術祭の敷居を下げすぎてしまうと、訓練や研鑽を伴わない「単なる自己満足」に陥る恐れがある。

- **自己研鑽の重要性**

プロ・アマを問わず、自らを高めようとする「自己研鑽」こそが表現の根幹である。NHKの「のど自慢」のように、厳しい練習を積んだ末に評価（合格の鐘）を得るからこそ、観る者に響くものとなる。

- **向上心の尊重**

アマチュアであっても、現状に甘んじることなく、自らを高めていこうとする姿勢を大切にすべきである。

➢ **プロフェッショナリズムへの敬意（リスペクト）**

本物の表現に触れることは、観客に深い感動と尊敬の念を抱かせる。

- **実例としての舞台**

先日、F 委員が出演された舞台（「リアの道化たち」）を拝見したが、その圧倒的な演技はまさにプロの領域であった。舞台に立った瞬間に別人へと変貌するような卓越した技術と存在感は、観る者に驚嘆とリスペクトを抱かせる。

- **プロの役割**

芸術祭の要所において、こうしたプロの質の高い公演や出展を組み込むことは不可欠である。それが指標となり、次世代の表現者が高みをめざす動機付けとなる。

➢ **「高みの追求」と「裾野の拡大」の両立**

芸術の発展と継承には、トップレベルを維持する「高み」と、多くの人が参加する「すそ野」の両方が必要である。

- **相互補完的な関係**

すそ野を広げなければ高い山は形成されないが、同時に高い目標がなければすそ野も活性化しない。

- **芸術監督の役割**

この「質の担保」と「参加の門戸」の極めて難しいバランスをいかに取るかが、ディレクター（芸術監督）の重要な手腕であり、役割であると考える。

【Ｂ委員】

➢ **「フラットな共存」による実験的アプローチ**

昨年の「下町芸術祭」では、あえてプロとアマチュア、あるいはアーティストの経歴による「ゾーニング（区分け）」を行わず、すべてのプログラムを並列に扱う方針をとった。

- **実践例**

中学３年生の少女による初の個展のすぐ隣で、プロのコンテンポラリーダンス公演や専門的なインスタレーション展示を同時に開催した。

- **意義**

表現の場において垣根をなくすことで、参加者がアーティストと対等に共存し、境界線が溶け合う瞬間が生まれた。特に若い世代にとって、プロと同じ土俵に立つ経験は大きな自信となり、「次なる表現の種」をまくという意味で非常に有効であったと感じている。

➢ **外部評価と「見どころ」のジレンマ**

一方で、表現の垣根をなくすアプローチには、観客（第三者）の視点における課題も浮き彫りになった。

- **分かりにくさの露呈**

来場者からは「どこが見どころか」、「何をマストで見るべきか」という問いが多く寄せられ、情報の優先順位が伝わりにくいという指摘を受けた。

- **指針の必要性**

すべてを等価に扱うことは、鑑賞者に対するナビゲーションとしては不親切になる側面がある。

➢ **「市民の変容」と「事業性」の折り合い**

芸術祭がめざす「市民の自己変容（成長）」や「コミュニティ形成」と、対外的な「にぎわい創出（観光・集客）」の間には、ある種の矛盾や乖離が存在する。

- **今後の検討課題**

住民が主体となって表現の芽を育てていくプロセスを重視しつつ、外部から訪れる多様な人々に対しても魅力的な「芸術祭」としてどう成立させるか。八尾の芸術祭において、この「質」と「包摂性」の折り合いをどう付けていくかが、大きな悩みどころであり、今後の重要な戦略ポイントになると考えている。

【Ｅ委員】

➢ **障がい者表現の場と「ユニークゾーン」の広がり**

自身が障がい者と共にダンス（ブレイクダンス等）を行った経験から、人々が表現できる場（ユニークゾーン）が国内外で増加している現状を注視している。

➢ **「伴走者（アカンパニスト）」によるプロとアマの共創**

2017 年に行われた「大阪府障がい者舞台芸術オープンカレッジ 2017 with スローレーベル」のスローレーベル SLOW LABEL（横浜）による実践例を紹介したい。

- **プロによるサポート**

プロのダンサーや志望者が「アカンパニスト（伴走者）」となり、多動などの特性を持つ表現者と密に連携する仕組みがある。

- **安全と表現の両立**

単に混ぜるだけでなく、プロが事故防止や表現の質の担保を担うことで、約 5 年間の研究を経て、最終的にパラリンピック開会式の成功へと結実した。

➢ **「ごちゃまぜ」から生まれる可能性と、市民の関わり方**

最初から多様な人々が混ざり合うことで、「その場で関わる自分たちにできるサポートは何か」という気づきが生まれる。

- **できることの積み重ね**

「できないこと」に目を向けるのではなく、「できること」を少しずつ広げ、参加者がつながっていくことで、結果として質の高い作品が完成する。

- **多様な模索の形**

外部団体のワークショップを活用したり、コミュニケーションの型（フォーム）を構築したりするなど、実験的な試みを重ねることで、八尾においても「ここまでなら市民でできる」、「ここからは専門的なサポートが必要」といった具体的な役割分担や、新しい共創の形が見えてくるのではないかと考えている。

【Ｆ委員】

➢ **「やおうえるかむコモンズ」における「ごちゃまぜ」の適性**

これまでの議論にあった「プロ・アマを問わない並行・共存」や「表現の芽をまく」、「できることを増やす」という方針は、現在の「やおうえるかむコモンズ」の理念や実態に非常に合致していると感じる。

➢ **市民主体による会場運営の実践と成長**

令和 6 年度（2024 年度）から導入された「会場リーダー」制度により、市民が主体となって会場を動かす仕組みが本格化している。

- **権限の委譲と多様性**

各イベントの内容を会場リーダーに大きく委ねているため、会場ごとに違いや特色が出るのは自然な流れである。

- **継続による改善**

２年続けてリーダーを務める市民も現れており、経験を糧に改善を重ね、自身ができることを着実に増やしている姿が見受けられる。

➢ **次世代を担う「裏方・ネットワーカー」の育成**

同年度から開始された「アートコーディネーター養成講座」の役割も極めて重要である。

- **人材の集積**

ボランティアスタッフや「芸術文化を通じたまちづくり」を志す約 30 名の参加者が、各会場の運営を支えている。

- **キャリアの展望**

参加者の中には、将来的に自身が会場リーダーになりたいという意欲を持つ人も出てきており、裏方としてのネットワーカーが着々と育っている。

➢ **2028 年度以降を見据えた仕組みづくり**

現在は、2028 年度以降にこれらの人材がより一層活躍できるための土台を作っている段階である。

- **提言**

市民主体の運営が成熟しつつある現状を踏まえ、八尾の芸術祭においても「並行・ごちゃまぜ」というアプローチを取り入れ、多様な主体が共創できる仕組みを構築していくべきだと考える。

【会長】

➢ **別府（ベップ・アート・マンス）の事例にみる「表現の二層構造」**

他都市の先行事例として、大分県別府市の事例を挙げたい。

- **発展の経緯**

当初は「混浴温泉世界」という国際芸術祭のボランティアだった市民たちが、プロの表現に触発され、自らも表現したいと動いたことで「ベップ・アート・マンス」という市民文化祭的なプラットフォームが誕生した。

- **構造の分立**

結果として、エッジの効いたプロの個展形式（in BEPPU）と、市民による自発的な表現活動（アート・マンス）という「二層構造」が成立した。これは一つの有効なモデルである。

➢ **八尾における表現の「並存」と「戦略」**

これまでの委員による議論を踏まえ、芸術祭のあり方として以下の二つの方向性が考えられる。

- **二層構造モデル**

鋭い感性を持つプロの作品を際立たせる部分と、市民の表現を広く受け入れる部分を明確に分ける。

- **フラットモデル**

昨年の「下町芸術祭」のように、あえて線引きをせず、すべてを並列に共存させる。

- **展望**

プロの尖った表現と市民の広範な活動をいかに「並存」させていくか。これは、今後の組織運営や具体的な企画段階において、推進会議や実行委員会の皆様とさらに議論を深めていくべき重要事項である。

（２）審議会委員による事業視察アンケートについて

事業視察アンケートについて、資料５に基づき、事務局から説明。

【Ｇ委員】

➢ **視察の重要性と委員の関与**

芸術祭の構築にあたっては、現場を直接見なければ判断できないことが多い。自身の視察経験を踏まえ、審議会委員による現場視察及びアンケート回答率の向上を求めたい。

➢ **名称の混在による広報（PR）の混乱**

「まちかどライブクリエイション」、「やおうえるかむコモンズ」といった名称が乱立しており、一般来場者にとって非常に分かりにくい状況にある。

- **情報の錯綜**

例えば古墳でのライブの場合、「古墳のイベント」、「まちかどライブクリエイション」、「やおうえるかむコモンズ」の３つの呼称が登場し、何を見に来たのかが曖昧になる。

- **整理の提案**

名称やブランドイメージを整理・集約し、シンプルに伝える必要がある。例えば、高校合同文化祭なども「まちかどライブクリエイション」の枠組みに統合し、全体を「やおうえるかむコモンズ」という総称でブランド化するなど、戦略的な整理が不可欠である。

➢ **主体の明確化（「官」から「民」への見え方）**

現場での運営体制について、市職員の存在感が強く、「市のイベント」という印象が拭えない。

- **リーダーの不在感**

視察した際、会場リーダーが誰なのかが判然としなかった。受付や案内などの表舞台を市職員が担っている現状では、市主導の印象を与えてしまう。

- **推進会議の役割**

市民ボランティアや推進会議メンバーが主体となって運営している姿を、より明確に打ち出していくべきである。

【会長】

市役所の立ち位置はどうか。僕は市役所の事務局の方が今現役の方も、異動された方もみんな自発的に出てくださっているというのは、理想的な形じゃないかなと思っている。嫌々

動員されているというのではない。

例えば、首長がこういう芸術祭をやりたいとか、音楽祭をやりたいと言ったことで、休日なのに動員されて、嫌々というのとは違う形で、みんなが繋がって行政の方もやってくれているから、僕はすごく望ましい形なのかなと思う。

【Ｇ委員】

市の方が出ていること自体はダメとは思わないし、嫌々やっている感がまったくないので素晴らしいなと思った。ただ、推進会議の方と市役所の方が一緒にやっているというより、受付は市役所の人という形に見えた。2 つの会場しか見ていないし、もっといろいろ見ないといけないとは思うが、もう少し融合している感があってもいいなという気がする。

【Ａ委員】

➢ **現場運営におけるマンパワー不足の現状**

現場の切実な状況を報告したい。

- **会場リーダーの多忙さ**

  会場リーダーは当日の運営全般に奔走しており、受付や案内に常駐することが物理的に困難である。そのため、市職員やアートコーディネーター養成講座の受講生に受付や案内をしていただかざるを得ない実態がある。

- **持続可能性の課題**

  すべてがボランティア（手弁当）による運営であるため、2 年、3 年と継続する中でマンパワーを維持・確保することに苦心している。今後は会場リーダーを孤立させず、よりスポットを当てて前面に立てる体制づくりが必要である。

➢ **名称と事業位置付けの「交通整理」**

乱立する名称については、4 月以降の最優先課題として整理を進める。

- **「やおうえるかむコモンズ」の本質**

  条例に基づく「有機的なネットワーク・仕組み」そのものを指す。このプラットフォームを広げていく活動全体がコモンズである。

- **「まちかどライブクリエイション」の役割**

  2028 年の芸術祭開催に向けた「パイロット（試行）事業」と位置付けている。いきなり本番を迎えるのではなく、市民を巻き込み、自主事業を育てるための実験の場である。

- **イベント名へのこだわり**

  各主催者が愛着を持って付けている名称（例：古墳でコーフン）も尊重しつつ、いかに「八尾の芸術祭」としてのブランドを市民に浸透させるか、そのバランスを追求する。

➢ **2028 年度に向けた展望**

現在の混乱は試行錯誤の過程である。何を一番に浸透させるべきかを明確にし、推進

会議や実行委員会での議論を通じて、2028 年度の芸術祭というゴールに向けて一歩ずつ階段を上っていきたい。

３．報　告

ワーキング部会による芸術祭の開催構想（案）について

芸術祭の開催構想案について、資料 6 に基づき、事務局から報告。

【会長】

５回でよくここまでまとまったなと思う。僕は残念ながら最後の回は出張と重なって参加できなかったので、どういう風に最後まとまるのかなと思っていたが、思っていた以上の整理の仕方になっているなと個人的には感じている。

もちろんこれから詰めなくてはならないことはたくさんあるのだが、今日は残りの時間で、どのくらいの話ができるか。

【Ａ委員】

まず、組織が大きく変わる。今までは、市の中の推進会議であり、幹事会、全体会だったものが、実行委員会を立ち上げ、それを任意団体にする。この組織のあり方と、運営というか、主体的に企画をしていくのは、実行委員会になってこようかと思うのだが、ぜひ審議会の委員の皆さまも、この任意団体の実行委員会に入っていただき、こんな芸術祭にしていけばいいというご意見をいただければと思っている。

市の方は、推進会議が条例の中にちゃんと市の組織として記載してあるので、やはり下支えをしていただく。

また、審議会は、それを評価していただくところになっていると思うので、我々の活動というものを評価いただき、ぶれているところがあれば、それを軌道修正していただくという立ち位置で、いろいろご指導ご鞭撻いたければありがたいと思っている。

【会長】

- **八尾独自の運営体制「三位一体モデル」への期待**

現在検討されている「コモンズ推進会議（主催・戦略）」、「実行委員会（現場・実行部隊）」、「八尾市・事業団（事務局）」という三位一体の構造は、全国的にも類を見ない画期的な試みとなる可能性がある。この体制が最適解となるよう、慎重かつ前向きに議論を深めたい。

- **過去の失敗事例に学ぶ：行政主導と既存団体の課題**

かつての「神戸ビエンナーレ」などの事例を振り返ると、いくつかの構造的な課題が見えてくる。

- **行政事務局の限界**

市職員が事務局を担う場合、芸術祭のプロデュースやマネジメントの専門性に欠けることが多く、クオリティの維持が困難になる。

- **特定団体の動員**

既存の文化団体や文化協会が主導すると、組織のヒエラルキーによる「動員」が優先され、市民が垣根なく、自由に参加できる場になりにくい。

- **継続性の欠如**

首長の交代などの政治的要因に左右されやすく、真の「レガシー（遺産）」として地域に根付かないリスクがある。

➢ **「やおうえるかむコモンズ」の強みと実行委員会の展望**

これに対し、八尾の「やおうえるかむコモンズ推進会議」には既に多くの民間のパワーが注入されており、非常に心強い。

- **民間のフレキシビリティ**

今後組織される「実行委員会」は、単なる動員機関ではなく、推進会議のように自由闊達なアイデアを活かせる場であるべきだ。

- **理想の結びつき**

行政が持つ「社会的な信頼感」と、民間が持つ「柔軟で創造的な行動力」が、対等かつ有機的に結びつく形をめざしたい。

- **未知数への挑戦**

実行委員会という任意団体がいかに機能し、民間の良さを発揮できるか。この仕組みづくりこそが、八尾の芸術祭の成否を分ける鍵となる。

【Ｅ委員】

気になったことがある。お客さんは八尾の人が中心となるのか。

【Ａ委員】

メインターゲットは八尾市民で、お客さんだけではなくて、参加する。それは制作に参加したり、鑑賞することに参加したり、参加する人は八尾市民をメインターゲットにする。

【Ｅ委員】

➢ **八尾市の人口動態を踏まえた戦略的視点**

八尾市は中核市でありながら高齢化が進んでおり、現状では地域活動において年配層の存在感が非常に強い。この現状を逆手に取り、市内完結型のイベントに留めるのではなく、外部の人が八尾を魅力的なまちだと感じるようなアレンジが必要である。

➢ **「外から来る表現者」と「支える市民」の共存**

八尾市民がパフォーマーとして出るだけでなく、多様な地域からクリエイターが集まり、八尾のまちを舞台に創作（クリエイション）を行う仕組みを強化すべきである。

- **神戸・新長田の事例**

「下町芸術祭」においても、拠点であるダンスボックスには全国からダンサーが集まり、まちなかで踊っている。

- **市民の役割**

八尾市民は、外部の表現者を温かく迎え入れる「サポーター」や「共創者」として関わる。「八尾のまちなかでもこれだけの面白いことができるんだ」という誇りを持って、外部と繋がっていく参加の形が望ましい。

➢ **高校生の参画モデルを全世代へ展開**

現在、高校生が「高校合同文化祭」に主体的な参加者として関わっていることは非常に良い傾向である。

- **多世代への応用**

この「自ら関わり、場を作る」という若者のエネルギーや仕組みを、年齢層を上げて全世代に広げていく。

- **構想案へのスパイス**

既に開催構想案はまとまりつつある段階だが、単なる「市民発表会」に終わらせないために、こうした「外部との交流・共創」という視点をスパイスとして組み込み、内容をさらに研ぎ澄ませていくべきである。

【Ａ委員】

置いてきぼりにするのではなくて、メインターゲット、サブターゲット、波及効果、すべてを意識しながら芸術祭を組み立てていこうということだ。

八尾市の条例の中でやっていくことなので、八尾市民は、やはりメインになっていかないといけない。民間団体が自由にやるのではなく、八尾市の税金を投入しながらやることなので、そこはやはりメインターゲットに入ると思っている。

でも、ほかを置いてきぼりするのではなく、ちゃんと波及効果、サブターゲットを意識しながら、組み立てていきたいと思っており、実際にはこの４月から考えるので、一緒に考えていただければなと思う。

【会長】

シティプロモーションや観光というのを表に出す芸術祭であれば、来訪者にたくさん来てもらうために、別に外向けでいいわけだ。でも今の位置づけはそうではない。あくまでも市の予算でやるということだからということか。

まだ少しだけ時間があるので、他の方もご意見をいただければと思う。

【Ｇ委員】

まちかどライブクリエイションは、パイロット事業として、今はいろんなコンテンツがあると思うが、芸術祭で一つのコンテンツをやりたいなと思った人がいた場合、実行委員会の図でいうと、どこに入るのか。実行委員会から関わる感じなのか。それともそのコンテンツ自体は推進会議である程度決め、その実動部隊として、実行委員会に入ってもらうという感じなのか。

【Ａ委員】

➢ **「コラボ型事業」の推進とサテライト会場の展開**

現在「まちかどライブクリエイション」で試行している手法をさらに発展させ、芸術祭本番に向けて「コラボ型」の事業を強化していく。

- **重層的な会場構成**

  実行委員会が主導する「メイン会場」だけでなく、多様な主体による「サブ会場」や「サテライト会場」を芸術祭の枠組みの中に位置づける。

- **面的展開**

  点としてのイベントではなく、八尾市全体を「面」として捉え、各地域で同時多発的に活動が行われる状態をめざす。

➢ **実行委員会を核とした柔軟な連携体制**

すべての事業を主催者が直接運営するのには限界があるため、外部の知見や活力を取り込む仕組みが必要である。

- **参画の呼びかけ**

  コラボレーションを行う団体の代表者には、実行委員会にも加わっていただき、対等なパートナーとして対話を重ねていきたい。

- **主導と共創のバランス**

  根幹となる大きな事業は実行委員会が主導権を持って質を担保しつつ、サテライトやコラボ事業を増やすことで、芸術祭の裾野を広げていく。

➢ **持続可能な「仲間づくり」への展望**

現時点では構想の段階ではあるが、関わる人や地域を有機的につなげ、仲間を増やしていくことが芸術祭成功の鍵である。

- **目標**

  2028 年に向けて、一人ひとりの「やりたい」という思いを芸術祭という大きなうねりの中に組み込み、八尾全体で盛り上がれるネットワークを１歩ずつ築いていきたい。

【事務局】

➢ **柔軟な参加形態の確保と「仲間受け入れ」の土壌**

市が設置する公式の会議体（推進会議）には、委員の委嘱手続き等の制度的制約があり、誰もが自由に出入りし、活動を共にすることが難しいという実情がある。

- **受け皿としての任意団体**

芸術祭に関わりたいと願う多様な市民や仲間を広く受け入れるため、市直営の組織とは別に、機動力と融通の利く「任意団体（実行委員会）」という形態が必要であった。

➢ **資金調達（協賛金・助成金）の円滑化**

市の行政機関が直接、民間企業からの協賛金や外部の助成金を獲得・運用することには、公会計上の高いハードルが存在する。

- **資金運用の自律性**

実行委員会という独立した組織を立てることで、民間からの協賛や公的な助成金を柔軟に受け入れ、芸術祭の原動力として活用できる体制を整えた。

➢ **今後の組織運用方針**

「何か一緒に活動したい」という意欲を持つ市民や団体には、まずは実行委員会のメンバーとして参画していただく。

- **役割分担**

市からの委嘱に基づく「推進会議」と、よりフラットで実働的な「実行委員会」という二層の体制を整理・運用することで、行政の信頼性と民間の自由な活動を両立させていく。

【Ｇ委員】

➢ **他都市（大阪市東成区）における「外の力」の活用事例**

東成区のにぎわいづくり事業に企画チームとして参画した経験から、地域内完結に陥らないための戦略を提案したい。

- **新しいコンテンツの創出**

従来の商店街イベント等の継承だけでなく、あえて区外で活躍する実力のあるプレイヤーや有名なキッチンカーなどに直接声をかけ、誘致を行った。

- **相乗効果とハレーションの克服**

当初は地元との摩擦もあったが、継続するうちに「外の刺激」が地元の意欲を喚起し、区内からも新しい活動が生まれる好循環（仕掛け）に繋がった。

➢ **外部プレイヤーの招聘による広報（PR）の強化**

八尾市は市内の活動は活発だが、対外的な発信力に課題がある。

- **発信源としての外部人材**

市外で活動する表現者や企画者（クリエイター）を実行委員会に巻き込むことで、彼らが「今度、八尾で面白いことをやる」という情報を外部へ拡散してくれる。外の人が八尾に来て発信すること自体が、強力な広報戦略となる。

- **タグラインの統合とブランドイメージの定着**

  芸術祭のタグラインについては、既存のものを活用すべきである。

- 「アートをまたぐ、まちをつむぐ」の継承

  「やおうえるかむコモンズ」のこのタグラインは非常に完成度が高く、素晴らしい。

- **一貫性の重要性**

  芸術祭のために新しい言葉を作るのではなく、この言葉をそのまま芸術祭のタグラインとして据えることで、市民や来場者にとってもメッセージがしっくりと馴染み、ブランドとして浸透しやすくなると考える。

【会長】

実行委員会という任意団体を作るということで、資金調達する面でもかなりフレキシブルに動けるのではないかと思うが、財布をどこが持つのか。

この資料だと、会計は八尾市と事業団になっている。実行委員会形式、つまり、やおまちかど芸術祭実行委員会という名称になるとして、その実行委員会の口座を作り、そこにお金が集まるようにするわけである。だが、実際の口座の運用や会計管理をするのは八尾市か事業団という建付けでいいか。

【事務局】

その点について、まだ結論が出ていない。

八尾市の中でも、同じような任意団体はある。環境部局や祭りの実行委員会などがあり、会計手法についてヒアリングしたが、会計をどうしていくか、他の団体がやっているやり方が果たしてそれでいいのか、疑問に思うところがある。

ただ、実行委員の他の方で会計を担えるかというと、現実的に担える人はいないと思う。

事業団とも相談したが、事業団は公益財団法人であり、公益財団法人としての会計と別の会計を持つのは、現実的には難しいことがわかった。

なので、体制をどうするかについては、継続的に議論していかないと、現実的に大変だということを事務局としても感じている。

【会長】

- **豊岡演劇祭における「官民混成」の運営実態**

  豊岡演劇祭の立ち上げ時の事例を紹介したい。

- **組織の二層性**

  表向きは豊岡市が主体に見えるが、実態は「実行委員会」という任意団体が運営を担っていた。

- **変則的な事務局機能**

  行政の「大交流課」という部署が中心に関わりつつ、実働部隊として多くの「地域おこし協力隊」がコーディネートを担うという、官民が入り混じった柔軟（かつ特異）な形態をとっていた。

- **資金管理の実際**

口座は実行委員会代表である市長名義のものを活用していた。法的な厳密さと現場の機動力の間で、いかに「動ける財布」を持つかが鍵であった。

➢ **下町芸術祭における事務局と口座の名称戦略**

新長田の下町芸術祭においても、試行錯誤があった。

- **拠点による運営**

事務局を NPO 法人（ダンスボックス）に置き、専門的なマネジメント機能を担保していた。

- **名称の工夫**

実行委員会名を、「新長田アートコモンズ」というプラットフォームとしての名称にしていた。これは、特定のイベント名に縛られない継続的な活動体としての意思表示でもある。

➢ **八尾における資金運用の検討課題**

- **法人格のハードル**

一般社団法人などの法人格取得について、信頼性は高いが、設立や維持のハードルも高い。

- **実効性のある「財布」**

協賛金や助成金を柔軟に受け入れ、かつ適正に運用するために、誰がどのような名義で口座を持ち、実務を回していくのか。八尾の三位一体モデルにおいても、この「資金管理の透明性と機動力の両立」については、慎重かつ具体的に設計していく必要がある。

【Ｅ委員】

下町芸術祭について、公開制にはしていたのか。下町芸術祭もキャッシュが入ってくる。公開制にしておかないと、どれだけお金が動いているかがわからない。

【会長】

実行委員会は定期的に開いていたし、会計報告もやり、監査もやって、どれだけお金が動いたかわかるようにしていた。

【Ｂ委員】

下町芸術祭については、一番初めは、まちづくり協議会の会長さんや、婦人会の方など、構成員がほぼ地域の重鎮さんたちというところにしていたのだが、今は代替わりして、重鎮の方というよりは、実動部隊がそのまま実行委員会になっているという状態である。

【Ｅ委員】

➢ **下町芸術祭にみる「理想的な多世代共生」の風景**

SNS（Instagram 等）を通じて垣間見える「下町芸術祭」の現場には、八尾がめざすべき一つの形がある。

- **幅広い年齢構成**

子どもから現役世代、高齢者までが文字通り「わいわいがやがや」と混ざり合い、下町芸術祭の参加者としてやり遂げたことで、打ち上げを楽しんでいる。

- **マンパワーの源泉**

世代を超えた多様な人々が主体的に関わることで、強固なコミュニティに根ざしたマンパワーが育まれ、それが芸術祭を動かす力強いエネルギーとなっている。

➢ **八尾における可能性と「内向き」な課題**

八尾市においても、多世代の層は厚く、同様の盛り上がりを創出する潜在能力は十分にある。しかし、現状ではいくつかの懸念点も感じる。

- **伝統による制約**

八尾には守るべき伝統がある一方で、それが時に新しい動きを抑制（スポイル）してしまっている側面はないか。

- **「外」への発信力の弱さ**

良い活動であっても、どうしても「地域内」で完結させようとする内向的な傾向（弱さ）が見受けられる。

➢ **今後の展望：開かれた芸術祭への転換**

八尾の強みである多世代のエネルギーを活かしつつ、伝統の枠に閉じこもらずにいかに「外」へと開いていくか。

- **目標**

内輪のイベントで終わらせず、外からの刺激を受け入れ、広域に発信していく姿勢を持つことで、八尾の芸術祭はさらに一歩先のステージへ進むことができると考える。

【Ｂ委員】

➢ **新長田における組織の変容：外部人材（「渡来人」）の主導**

「新長田アートコモンズ実行委員会」の事例では、当初は地元のメンバー中心であった組織が、回を重ねるごとに外部人材が主体となる組織へと変容していった。

- **多様な構成員**

実行委員の多くが 30～40 代の若手事業者であり、必ずしもアート専門家ではない「外部の視点」を持つ人々（渡来人）が中心を担っている。

- **健全な代謝**

内部の人間だけで固まらず、外部の人間が実行委員会の中心にいる状態は、組織として極めて健全である。

➢ **内部と外部の相乗効果（相互研鑽）**

芸術祭の目的が「地域住民の憩いや文化育成」であることは大前提だが、外部人材の「関わりしろ（参画の余地）」を担保することが不可欠である。

- **感化と成長**

外部的視点が入ることで、内部の人々が刺激を受け、互いに切磋琢磨し合う（研鑽し合う）環境が生まれる。

➢ **芸術祭を起点とした新たな生業（経済活動）の創出**

芸術祭を単なる一過性のイベント（面）で終わらせず、中長期的な地域の活力へと繋げていく視点が必要である。

- **3 年後、5 年後を見据えて**

外部から参画した事業者が、芸術祭をきっかけに八尾市内に拠点を構えたり、新たなビジネスを始めたりするような流れを作りたい。

- **実社会への還元**

芸術祭を通じて、新たな「生業」や「経済活動」の芽が生まれること。そのために外部人材を組織の核に招き入れることは、八尾の未来にとって大きな意義を持つ。

【会長】

運営体制、特に会計をどうするかということで、意見交換をしているのだが、どこで議論を続けるのか。審議会でやるべき議論ではないと思う。

【事務局】

推進会議というよりは、市と事業団との話し合いや、推進会議の中でも正副の会長、役員がいるのだが、そういった方々との話し合いにしないとまとまらないと思う。推進会議でも 10 何人いることから、そこで議論がまとまるとは考えにくいと思うので、一部の方でまずは議論し、どういう形でやっていくのが現実的に可能なのかというのを探っていきたいとは考えている。

【Ｅ委員】

茨木市では結構いろんなワークショップがあって、芸術祭ではないが、それに近しいことをやっている。

【会長】

茨木市は財団があるので、財団の事業が結構多い。財団の事業であれば全然問題ない。

【Ｆ委員】

それは八尾市の場合、民がかなり入り込んでいるからということか。八尾市の場合、事業

団の活動はもちろん他にされていて、かつ民間がかなり入っている段階である。

【Ｅ委員】

民が入ると、いろんな思いがあるから、なかなか難しいかなという気はするのだが、柱になるテーマ性があれば、高まっていくのかなという気がする。

【Ｂ委員】

- **内向きの士気を高める言葉の力**

新長田アートコモンズ実行委員会の事例を引き合いに、タグラインのもう一つの役割を提示したい。

- **「待っといたるわ、いっぺんやってみぃ」**

新長田ではこの言葉をテーマに据えている。これは外向けの華やかな宣伝文句ではなく、実行委員一人ひとりの士気を高め、「なぜ自分たちがここに集まっているのか」という存在意義を確認するための言葉である。

- **外向きの「体裁」よりもコアな「思い」**

対外的に綺麗に整えられたキャッチコピーとは別に、組織の内部に深く刺さる、よりフランクで力強い言葉があっても良い。

- **「とりあえずやってみ」の精神**

実行委員会の旧メンバーが新しく入ってきたメンバーに対し、「責任は取るから、まずは自由に挑戦してごらん」と背中を押すような、温かくも力強い態勢を言葉に込める。

- **組織のアイデンティティ構築**

八尾の芸術祭においても、外向きの美しいタグライン（例：「アートをまたぐ、まちをつむぐ」）を大切にしつつ、実行委員たちが自らの活動を肯定し、主体的に動けるような「コアな合言葉」を共有することが、健全で持続可能な組織運営に繋がると考える。

【Ｅ委員】

「おせっかい」が八尾の中でキーワードに入ってくるので、芸術的なおせっかいという形のキャッチコピーはあってもいいのかなという気がする。

【Ａ委員】

タグラインとキャッチコピーは継続審議であるが、それが目標や、それに沿って何かやろうよという、結束力みたいなものになってくると思う。心のよりどころというか、実行委員会のよりどころになってくると思うので、みんなでいい案を出して、いいのができあがればいいなと思う。

【会長】

もしかしたら審議会で議論することよりもちょっとはみ出たことの話になったかもしれないが、

お許しいただきたい。

予定していた審議はここで終了させていただきたいと思う。その他について、事務所から何かあるか。

４．その他

【事務局】

第３期アートコーディネーター養成講動のチラシを配布している。令和６年度から実施したこの講座も３期目を迎えることとなった。４月１日から募集が始まるのでお知らせする。

【Ｄ委員】

チラシを入れさせていただいているが、とっておきの音楽祭も、本当に町のおじさん、おばさんがやっている音楽祭で、10 回目になった。僕が言ったように、障がいのあるなしに関わらず、どんな人でもOKだという音楽祭である。中身もクラシック系から大正琴の演奏などがあり、東京パラリンピックの開会式の舞台に出た田川ヒロアキさん、長江健次さんのお二人がゲストで来てくれる。

カラーの変わった音楽祭だと思う。全国 23 か所プラス台湾でやっている。コンセプトは一つ、「みんなちがって、みんないい」という、金子みすゞの言葉だが、このコンセプトでやっているので、よかったら見に来てほしい。

【事務局】

本日の会議の内容については、ホームページへの掲載を予定しているが、掲載にあたっては委員の皆様へ内容の確認を行う。

会議の内容を要約したものを送付させていただくので、ご確認いただき、修正等があれば事務局へご連絡いただくようお願いする。

それでは、会議を終了させていただく。ご協力ありがとうございました。